

出題分析		
試験時間 120 分/2 科目	配点 60 点	大問数 3 題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]	
<p>【概評】</p> <p>大問数は例年通りの 3 題であり、Ⅰは小問集合、Ⅱは理論・無機分野、Ⅲは有機分野からの出題である。Ⅰは小問が 10 問という例年通りの問題数であり、解答を選択する数は昨年同様、A、B の 2 つであった。Ⅱ、Ⅲは昨年と異なり中間に分かれていないが、全体としては昨年と同程度の分量と言えるだろう。受験生が知らないと思われる知識、化合物を題材にした問題が多く、解きにくい印象をもったのではないだろうか。また、「正しい記述は () 個」や「正しいものをすべて選べ」など、新傾向の正誤問題が出題された。問題数も多く、時間的には非常に厳しかったであろう。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	小問集合	小問が 10 問出題されたが、解答数は昨年同様各 2。計算を要する設問は昨年と変わらず 7 問。比較的解きやすい問題が多い。(4)は設問の意味が理解できるかどうか。(10)は原料から高分子の分子式を求めればよい。 選択 20 問、そのうち計算を要するもの 7 問。	標準
II	理論・無機の総合問題	人類の技術の進歩をテーマとした理論・無機の総合問題。リード文は初見の内容であり一部細かい知識を問われたが、大部分は高校化学の範囲で十分解答できる。問 3 は水溶液中で水素イオンを受け取ることがヒントであった。問 7 は新・旧課程どちらの受験生にも解答できる形式であり、配慮されていた。 選択 4 問、反応式 2 問、計算 3 問。	標準

設問別講評			
Ⅲ	クリック反応	クリック反応をテーマとした有機分野の総合問題。当然、高校では学習しない反応であり、思考力が問われた。問1のノーベル賞に関する問題は、知識がなければ解答できない。問2や問9の構造式は、五員環、六員環であることを手掛かりにすれば解答できる。 構造式3問、名称1問、選択3問、計算1問、反応式1問。	標準

合格のための学習法

標準的な問題が多いが、問題量が多いのでスピードが要求される。過去問演習をしっかりと行い、時間配分をつかんでおきたい。また、普段から問題を見たらすぐに解法が思いつくように訓練しておく必要がある。初見の物質や実験、装置などを題材とした、応用的な問題が出題されることがあるため、そのような問題にも冷静に対処できるよう、普段から原理原則を考え、意識するクセをつけて高得点を目指してもらいたい。